

祈りのきずな

6月

ホセア書6章～ミカ書3章

南光台教会（宮城）牧師 田中 信矢（たなか しんや）

1日(月)ホセア書6章1～3節

6月の始まり。雨音を聞きながら主の慈しみを深く味わいたい。主を知ることには辞書を引くことではない。雨宿りの最中に肩を並べてお喋りするような親密さだ。主は曙の光のように必ず訪れて、私たちの打ち傷を癒やし、地に注ぐ雨のように私たちの心を潤す。主に立ち帰り、今日という日を歩み出そう。
神戸西教会と広島尚牧師(兵庫・神戸市垂水区)

2日(火)ホセア書7章8～12節

生焼けの菓子のように、私たちは中途半端な信仰になってはいないか。神以外の力に頼り、自らの愚かさ^{みずか}に気づかぬまま高慢になっていないか。私たちはしばしば、迷う鳩のように行き先を見失う。主は愛という網を広げ待っておられる。自分の不完全さを認め、真実な助け主である神に立ち帰ろう。今日も！
神戸教会と井形英絵牧師(兵庫・神戸市中央区)

3日(水)ホセア書8章1～7節

面従腹背。「従う」と言いつつ、神に「背く^{そむ}」イスラエル。偶像を造り、自らの欲望に従う歩みは、やがて空虚な結果を招く。穂を实らせない麦のように、神の恵みを忘れた努力は実を結ばない。私たちは今日、どんなものを蒔こうとしているだろうか。変わらぬ主の約束の言葉に根差し、誠心誠意の種を蒔こう。
浜甲子園教会と森山一弘会員代表(兵庫・西宮市)

4日(木)ホセア書9章7～11節

預言者は時に「変人」扱いされる。しかし本当に規格外なのは、見捨てて当然の私たちを「宝」と呼び続ける神の愛の方である。主は、迷子の子どもを捜す親のように、執念深く、けれどどこまでも優しくあなたを見つめている。監視の目ではなく、愛おしくてたまらない眼差しに、今日は心地よく降参しよう。

尼崎教会と長尾知明牧師(兵庫・尼崎市)

5日(金)ホセア書10章1～4節

豊かになればなるほど、人は自分の力で幸せを作れると錯覚する。偽りの心を打ち砕き、主は耕^{たがや}そうとされる。偽りの言葉は、畑の毒草を育ててしまう。今日は「環境の日」。心という庭の草むしりをしてみよう。トゲだらけのプライドを抜けば、主の正義という瑞々しい苗が育つ場所が、そこに生まれる。

神戸新生教会と舟橋恵子責任者(兵庫・神戸市東灘区)

6日(土)ホセア書11章1～9節

幼い子の手を取り、頬を寄せて食事を与える神の姿は、もはや「親〇〇」と言えるほどの慈愛。どんなに反抗期をこじらせても、神は愛の絆で導かれる。背を向ける民を嘆きつつ、神は怒りより憐れみを選ばれる。愛は理屈を超えて手を伸ばす。失われた者を捜し出す主の愛は、今も生きて働いている。

伊丹教会と内田裕二牧師(兵庫・伊丹市)

7日(日)ホセア書12章4～7節

ヤコブは自分の力で全てを掴^{つか}もうと、神とさえ相撲をとった。実にしぶとく、愛すべき困った人だ。でも神は、そんな「不器用な一生懸命さ」を丸ごと受け止めてくださる。自らの腕力で掴むのを手放し、主の前で泣いて助けを求めた時、彼は本当の勝利を知った。強がりを卒業して、主の恵みを受け取ろう。

宝塚教会と南雅夫牧師(兵庫・宝塚市)

8日(月)ホセア書13章4～14節

お腹がいっぱいになると神を忘れる私たち。主が激しい言葉で迫るのは、あなたが絶望に呑み込まれるのを防ぎたい、守護者の情熱ゆえだ。神は、死の力さえも打ち破る希望の光。過去の失敗に怯える必要はない。主があなたを抱きしめている限り、どんな暗闇も、あなたから喜びを奪えない。

豊中教会と今給黎眞弓牧師(大阪・豊中市)

9日(火)ホセア書14章2～10節

「主に立ち帰ろう」。何度でも。主は癒やし、夜露のようにあなたの魂を潤される。梅雨の晴れ間、木々の緑が光るように、自分の無力を認めて神に依り頼むとき、枯れた心に再び命の息吹が吹き込まれる。百合のように咲き、オリーブのように輝く。主の道は正しい。軽やかな足取りで、今日を歩き出そう。

和歌山教会と調みくに牧師(和歌山・和歌山市)

10日(水)ヨエル書1章1～12節

いなごに食い尽くされた野原。喜びが枯れ果てた風景は、私たちの「心の不作」を映し出す。でも、どん底こそが神の舞台。当たり前だと思っていた日常が、いかに主の守りの中にあっかき気づくチャンス。今は泣き顔のままでもいい。主を見上げるその瞳から、新しい希望の芽が、もうすぐ顔を出さずだ。

奈良教会と葛西隆憲牧師、平山利香伝道師、伊藤智恵教会学校教育主事(奈良・奈良市)

11日(木)ヨエル書2章12～17節

「衣を裂くのではなく、心を裂け」。形だけのパフォーマンスではなく、神が待っているのは、むき出しのあなたの本音だ。神は怒るよりも、赦して抱きしめることを選ぶお方。梅雨の雨に濡れる紫陽花のように、主はあなたの涙を宝物とされる。深刻になりすぎず、素直な心で、今の思いを打ち明けてみよう。

みささぎ伝道所(奈良・奈良市、2026年3月末閉鎖。奈良教会第一福祉礼拝として引継。お祈りください)

12日(金)ヨエル書3章1～5節

「老いたる者は夢を見る」。神は、年齢を理由にワクワクを引退させてはくださらない。むしろ、経験を重ねた今こそ、主と共に壮大な夢を見る「黄金期」なのだ。すべての者に注がれる神の霊は、世代や身分を包括しつつ、大切な役割を与える。それはいかなる時にも、主の名を呼び求めること。そこに救いと希望がある。
堺教会と平良仁志牧師(大阪・堺市北区)

13日(土)ヨエル書4章13～17節

世界中の不条理に対し、主は「裁きの谷」で毅然と立ち上がられる。弱者を踏みにじる力に、主ははっきりと「NO」を突きつける。私たちは決して孤独ではない。歴史の背後で、神は正義と愛の天秤を握りしめている。不正が蔓延する世の中でも、最後には「誠実」が勝つことを信じて、心静かに胸を張ろう。
関西黎明教会と江田治男牧師(大阪・東大阪市)

14日(日)アモス書1章1～11節

羊飼いやアモスは、国境を越えて「残酷さ」を告発する。誰かの尊厳を踏みにじる行為を前に、神は決して黙さない。厳しい言葉の根底にあるのは、「苦しんでいる人を一人も置き去りにしない」という強い決意だ。現代社会の片隅で叫ぶ弱者の声に、私たちは耳を傾けているか。神は人の「うめき」を聞かれる。
東大阪教会と柴田良和・中村尚子各牧師(大阪・東大阪市)

15日(月)アモス書2章1～16節

貧しい人を物のように扱う社会。アモスの言葉は、私たちの冷めた心を熱情で揺り動かす。神の恵みを「当たり前」という箱に閉じ込め、隣人を「背景」にしていないか。でも主は、そんな私たちをも担いで歩いてくださる。今日は、自分を愛するように誰かを大切に、小さな「心の余裕」を主からいただく。
シオンの丘教会と川口まな牧師(大阪・藤井寺市)

16日(火)アモス書 3章 3～8節

獅子が吠えたら、誰もが足を止める。主が語られたら、心は動かすにはいられない。神と歩調を合わせることは、新しい景色を見つける旅だ。特別な才能がなくてもいい。アモスのように、ただ自分の持ち場で主の声に耳を傾ければいい。出来事や歴史の中に主の声を聴こう。聴く耳を持つ者に、言葉は宿る。

平野教会と松坂有佳子牧師、高田ゆかり派遣伝道者(大阪・大阪市平野区)

17日(水)アモス書 4章 9～13節

神は、私たちを振り向かせるために、あの手この手で「合図」を送ってくださる。時には足りなさを通して、私たちの「心のドア」をトントンと叩かれる。「神に会う備えをせよ」という言葉は、愛する者への招待状。「忠実なしもべよ、良くやった」と称賛されるよう、今日という日を誠実に、謙遜に歩みたい。

田辺教会と喜多村やよい牧師(大阪・大阪市阿倍野区)

18日(木)アモス書 5章 21～24節

「正義を洪水のように／恵みの業を大河のように」。キング牧師が引用したこの言葉は、人種差別と闘う魂の炎となった。神の国とは天上の理想ではなく、地に流れる公正の川。遠くにあるのではなく、日常の求めにこそ流れる。派手なイベントや祭儀よりも、主は絶えず流れ行く正義の清流を求めておられる。

大阪教会と下川俊也牧師(大阪・大阪市天王寺区)

19日(金)アモス書 6章 1～8節

安穩とした暮らしに浸り、国の滅びを憂えない指導者たち。象牙の寝椅子に横たわり、贅沢を尽くす陰で、社会の崩壊が始まっている。自らの幸福だけに安住し、他者の痛みに無関心であることは罪だ。私たちは時代に対する危機感を持ち、今、なすべき責任を果たしているか。主の警告は鋭く心に突き刺さる。

大阪中央教会と咸光玉・蔡永伊・文連子・渡辺正各牧師、内藤希代伝道師(大阪・大阪市中央区)

20日(土)アモス書7章1～10節

いなごや火の災いに対し、アモスは「主よ、お赦してください」と執り成した。しかし、下げ振りの幻は、民のゆがみが修復不能であることを示した。神の言葉を語る者は、時に王や権力者から疎まれる。信仰者は人ではなく、神に従う者。他者のために祈り、真実を語る勇気を、聖霊によって保とう。

和歌山中央伝道所と河亨植^{ハヒコウシツ}担任牧師(和歌山・和歌山市)

21日(日)アモス書8章1～12節

「夏の果物」は瑞々しいが、すぐに傷んでしまう。アモスは、今ある恵みの「旬」を大切にせよと告げる。神の言葉、真理が聞こえなくなる飢えが来る前に、目の前にある主の愛を味わい尽くそう。ふとその手をとめて、心の耳を澄ませてみる。主の穏やかなささききは、案外、あなたのすぐ隣で聞こえている。

堺伝道所と山口美香牧師(大阪・堺市北区)

22日(月)アモス書9章11～15節

夏至の太陽。どんなに激しい裁きの後にも、主は必ず「再生」の計画を用意される。倒れたテントを立て直し、再び喜びのワインを注ぎ、庭に木を植える。神は、壊れたものを慈しみ、新たにするスペシャリストだ。二度と抜かれることのない平安の地に、私たちは招かれている。希望の種を、今日植えよう。

東豊中教会と河野浩^{カノノ}牧師(大阪・豊中市)

23日(火)オバデヤ書1～15節

兄弟の苦難を「対岸の火事」として利用したエドムを、主は厳しく戒める。今日は「沖繩(命どう宝)の日」。戦時下での痛み、今も続く基地負担の重さ。主は「誰かの犠牲の上に立つ平和」を認めない。無関心を捨て、共に痛む。沖繩の涙は主の宝物。誰も独りぼっちにされない真の平和を、主と共に祈り、歩もう。

南千里教会と蓮池昭雄牧師(大阪・吹田市)

24日(水)ヨナ書1章1～17節

逃亡者ヨナ、嵐の海で「私を捨てろ」と開き直った。しかし主は、一人の命も海に沈ませない。どんな嵐の中でも、神は巨大な魚を「避難所」として備えてくださった。私たちが自分自身を見捨てても、主だけは、決してあなたの命を諦めない。あなたは主にとって最高の宝物。今日はその安心感に包まれて。

北大阪教会と古賀昭範牧師(大阪・守口市)

25日(木)ヨナ書2章1～11節

魚の腹の中。そこは、「神とのVIP対話室」だった。ヨナは、深淵に沈み、命が絶えそうなとき、救いは主にあると知り、感謝の歌を歌う。神は、絶望のどん底を希望の生まれる聖域に変える名手。行き止まりだと思った場所が、実は主の懐の中だったりする。主の不思議なエスコートを、楽しみに待とう。

京都洛西教会と李鎮鐵牧師(京都・京都市中京区)

26日(金)ヨナ書3章1～10節

ヨナのたった一行の「手抜き説教」で、国家がひっくり返る。神のユーモアは、私たちの不完全な努力さえも、最高のスパイスに変えてしまう。家畜まで断食させるニネベの必死さに、主の頬も緩んだに違いない。完璧な準備はいらない。不器用なままでいい。主の慈しみの海へ、大胆に飛び込んでみよう。

インドネシア伝道と野口日宇満宣教師のために

27日(土)ヨナ書4章1～11節

敵国の救いを快く思わず、とうごまの木一本に一喜一憂し、猛暑の中で死を願うヨナ。主は「君、それは正しいことかい？」と茶目っ気たっぷりにつっこみを入れる。私たちも自分の正義感に固執し、神の大きな慈しみを忘れてはいないか。神の愛は、私たちの狭い度量を超えて、すべてを包み込んでいる。

国際ミッション・ボランティアのために(佐々木和之氏・ルワンダ)

28日(日)ミカ書1章1～9節

山々が溶け出すような主の現れ。ミカは、民の悲しみを自分のものとして裸足で嘆く。誰かが泣いている時、一緒に涙を流せる人は、主の心に一番近い場所にいる。社会の痛みを見つめ、神と一緒に深いため息をついてみる。その共感の涙が、やがて癒しの雨となって、渇いた世界を優しく潤していくだろう。

シンガポール国際日本語教会 (IJCS) のために

29日(月)ミカ書2章1～11節

ベッドの上で悪事を企み、権力を使って他者の畑を奪う者たち。神は彼らに対して災いを計画される。正しいことを語る預言者を黙らせようとする風潮は、現代も変わらない。神は、不正を正すために立ち上がられる。私たちは安易な慰めに逃げることなく、主の厳しい叱咤を真摯に受け止める誠実さを持ちたい。

アジアバプテスト女性連合 (ABWU) のために

30日(火)ミカ書3章9～12節

「主は我らの中におられる。災いは来ない」と嘯きながら、利得のために動く宗教家たち。その腐敗ゆえに、聖なる山は荒れ地となると宣告される。自分たちの集まりを絶対視し、神を道具にしてはいないか。六月の締めくり、自らの信仰を点検しよう。謙遜に神と共に歩むこと。それこそが、主の求める道だ。

イドナ村女性協同組合(イスラエル・パレスチナ)のために

第54回女性連合総会(書面) 議案説明懇談会(オンライン)

10月3日(土) 10:00～15:00



今からどうぞご予定にお入れください！
たくさんの皆さまのご参加をお待ちしています。